氏　　　　名	中山　幸恵
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	健博　第72号
学位授与の日付	平成25年9月30日
課程・論文の別	学位規則第4条第2項該当
学位論文題名	心理的well-beingが高い虚弱超高齢者における老年的超越の特徴－新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて－
論文審査委員	主査　准教授　　藺牟田　洋　美
	委員　教　授　　石　井　良　和
	委員　教　授　　繁　田　雅　弘

論文の内容の要旨

【背景・目的】 高齢期の疾病罹患の増加や諸機能の低下は心理的適応にも大きく影響する。先行研究では、健康状態や生活機能の低下は主観的幸福感に負の影響を与えること、生活機能の低下者のうち8割がうつ病の発症リスクが高まる水準まで精神的健康が低下していることが報告されている。今後急増する身体的問題のある後期高齢者、超高齢者の心理的適応を促進するための対策が重要である。

本博士論文ではこの対策の基礎となる概念として老年的超越（Gerotranscendece; Tornstam、1989）に着目した。老年的超越とは高齢期に生じる価値観の移行を指す。具体的には、高齢期における望ましい生き方の一つである活動理論的な価値観『単純な生、健康、活動、社会的交流の重視』が弱まり、離脱理論的な価値観『死を身近に感じること、客観的な健康や社会参加を重視しなくなること』が強くなる。もし、高齢期の後半、機能回復や機能維持が難しい高齢者でも、老年的超越的な価値観へ移行することが可能であれば、自らの状態への否定的な評価が弱まり、心理的な適応が容易になるであろう。 しかし、日本の高齢者における老年的超越の内容や、その測定尺度については十分に研究されていない。そこで、本論文では、生活機能レベルの低下が認められる虚弱な超高齢者に適用可能な老年的超越の測定尺度の開発を行い、虚弱高齢者の心理的適応に果たす老年的超越の役割を検討した。

【方法および結果】 90歳代を中心とする10名の要介護高齢者に対して老年的超越に関する詳細なインタビューを実施し、虚弱超高齢者における老年的超越の概念整理および尺度項目の作成を行った。これを65歳から99歳の在宅高齢者500名に実施し、27項目8因子の日本版老年的超越質問紙（Japanese Gerotransendence scale:JGS）を作成した。下位因子として、「ありがたさ」「おかげ」の認識、内向性、二元論からの脱却、宗教的もしくはスピリチュアルな態度、社会的自己からの解放、基本的で生得的な肯定感、利他性、無為自然、が抽出された。

次に、虚弱超高齢者における心理的well-beingと老年的超越との関連について、地域在住の85歳から99歳の超高齢者の悉皆サンプル155名（参加率46.4%）により検討した。その結果、生活機能が低く心理的well-beingが高い者は、生活機能が低く心理的well-beingが者よりも、JGSの下位尺度のうち、内向性、社会的自己からの解放、無為自然の得点が高いことが示された。この結果は、老年的超越の一部の下位因子は心理的well-beingの高さと関連し、その

低下を緩衝する可能性を示唆するものであった。
一方、JGSの一部の下位尺度では信頼性が十分でなかったため、JGSの改良版を作成し、交差妥当性と再検査信頼性を検討した。70歳代、80歳代の地域在住高齢者1973名に改良版を実施したところ、JGSと同様の因子構造を確認できた。また、49歳から79歳のインターネット調査モニターにより、調査間隔1か月の8つの下位尺度の得点変化を検討したところ、再検査信頼性はr=.55～.83であり、十分な信頼性が確認された。

【保健福祉医療に対する貢献】高齢者ケアの場では、虚弱超高齢者が示す老年的超越的な特徴（表層的には孤立や不活発と見える行動や、機能改善に積極的でない態度）は心理的に不適応なサインとして、その修正を高齢者本人や介護者に求めがちであった。しかし、本研究の結果は、これらは虚弱超高齢者の新たな発達の姿である可能性を示唆するものであった。老年的超越理論やその状態像をケア従事者や介護家族へ教育することを通じて、彼らが関わるケアの評価やケアの方向性について視野を広げることを促すことができるだろう。

学位論文審査の要旨

本論文は、超高齢期に生じるとされる老年的超越というライフサイクルの第９段階に関わる発達理論に注目したものである。生活機能のレベルの低下が認められた虚弱超高齢者が陥る低い心理的well-beingに対し、老年的超越は心理的well-beingを改善させるというEriksonやTornstamの理論を本邦でも証明するため、日本の超高齢者の老年的超越を測定するための尺度開発に取り組んだ先駆的な論文である。
本研究では、27項目８因子（「ありがたさ」「おかげ」の認識、内向性、二元論からの脱却、宗教的もしくはスピリチュアルな態度、社会的自己からの解放、基本的で生得的な肯定感、利他性、無為自然）からなる日本版老年的超越質問紙（JSG）を作成した。さらに、生活機能が低く心理的well-beingの高い超高齢者では内向性、社会的自己からの解放、無為自然の３因子が高得点を示し、老年的超越理論をある程度証明した。さらに、改良版では交差妥当性と再検査信頼性も保証されている。
なお、審査では、以下について議論がなされた。JDSの一部の下位尺度では内的一貫性が低いことは、老年的超越を構成する因子ではない可能性があることが指摘された。確かにJSGの一部の因子に内的一貫性が低いものが含まれるため、信頼性を上げるためには該当する因子の項目等の再検討という課題や老年的超越に関する因果関係の証明等の課題はある。しかし、それを鑑みても、本知見は虚弱超高齢者の新たな適応の姿の可能性を立証した本邦初の論文であるとの総意に至った。
さらに慎重に審査した結果、本知見は今後急増するわが国の虚弱超高齢者の新たな適応の姿の可能性を示唆した点で極めて高い学問的価値を有すると三者間で一致した。なお、筆者はその後、主論文等の功績が日本老年社会科学学会により認められ、平成24年度に日本老年社会科学奨励賞の受賞に至った。
口頭試問においても、非常に誠実に応答し、今後の研究の発展も十二分に期待できた。
以上より、本研究が博士論文に値し、博士の学位（学術）に相当すると判断した。